

## 学位論文内容要旨

### 中国「生態保護政策」および「定住化プロジェクト」の影響下におけるモンゴル族牧畜社会の動態に関する研究

司 玉潔

本研究の目的は、生態保護政策と定住化プロジェクトがモンゴル族牧畜社会にもたらした影響について、その実施プロセスと現状に注目し、内モンゴル自治区と青海省の2地域の比較を通じて、その動態を総括的に論じることである。内モンゴルでは、半農・半牧に移った内モンゴル東部における小規模の「半遊牧」社会と「退牧還草」・「禁牧」政策に焦点を当て、青海では、チベット社会において独自の伝統的生活を維持してきた海西州における「遊牧」社会と「定住化プロジェクト」政策に焦点を当てた。

生態保護政策と定住化プロジェクトが名目上で異なる政策として実施されているが、その実施背景と目的からみて、いずれも西部地域の生態環境悪化の趨勢を抑制し、改善することを通じて社会発展を目指すことであった。現段階では、事例地の2地域において、政府の区別分類指導により、それぞれ「退牧還草」・「禁牧」を中心とする政策と「定住化」を中心とする政策が実施されている。しかし、各地の自然状況や生業の特徴によって、これらの政策が実施されているにもかかわらず、生態改善を目指すよりも経済的発展を優先していることが指摘できる。

生態保護政策は、内モンゴルの牧畜社会に全面的・徹底的とも言える大きな変動をもたらした。地下資源開発と新農村・新牧区の建設などと相まって、遊牧そのものを終焉に至らせた。また、それが後に行われた辺境地域における政策の実施プロセスと密接に関連している。換言すれば、内モンゴルでの大勢の牧民が生態保護政策の犠牲になり、持続的発展の生業を失った結果の反省ともなり、今日の辺境地域における「遊牧」の維持が可能となった。なお、辺境地域の資源開発を免れた遊牧の維持には、飼料栽培のできない自然環境の影響も考慮しなければならない。生態保護政策と定住化プロジェクトの実施プロセスには、地域の経済的発展が重要な影響を及ぼしているため、場合によって、生き残った地域の遊牧は観光化の資源とされ、それによってオボー祭祀やナーダムなどの伝統文化が地域の発展の計画に組み込まれ、復活する現象も起こっている。

このような、中国でも広い範囲に分布するモンゴル族牧畜社会の動態について、本論文では、内モンゴルと青海の事例を挙げて考察した。第1章では、生態保護政策と定住化プロジェクトの実施背景およびプロセス、内容についてまとめた。第2章では、内モンゴルにおける「退牧還草」・「禁牧」政策に焦点を当て、生態保護政策がモンゴル族牧畜社会にもたらした影響についてゲルチョロー・ソムの事例を通じて考察した。第3章では、青海省における定住化プロジェクトに焦点を当て、定住化政策がモンゴル族牧畜社会にもたらした影響について、海西州の2地域を事例に考察した。そして第4、第5章では、生態保護

政策と定住化政策の影響下における内モンゴルと青海地域のモンゴル族牧畜社会の比較を通じて、その実態を明らかにし、これらの政策の本質について検討した。

これまで、モンゴルの歴史において重要な存在であり、人口的には世界のモンゴル族の6割を占める中国のモンゴル族社会は、国家政策・制度の下で、様々な歴史を経験し、伝統的社会と文化が変容してきた。圧倒的な人口をもつ漢民族のほか55の少数民族からなる多民族国家である中国では、「伝統的な」有形・無形の文化と民俗が見直されているにも関わらず、少数民族の伝統的生業とそれによって形成された一連の文化が「後進的生産様式」として宣伝され、国家による改革の対象となり、急激な変容あるいは消滅の危機にさらされている。だが、遊牧を「後進的生業」と見なす宣伝や認識は、古典的文化（社会）進化論における狩猟採集→放・遊牧社会→農耕社会→産業社会というモルガンやチャイルドの原点に立った古い思想に過ぎず、国際社会ですでに提唱され半世紀以上経つ文化相対主義の立場から見れば、「個々の文化は、環境とのかかわりや移住の経験、隣接するほかの文化からの借用など、それぞれ固有の歴史の積み重ねによって形成されるもので、単純に進化の図式に位置づけることはできない」（沼崎 2006 : 57）という思想から完全に立ち遅れており、「一つの民族の生業様式の総体を文化と捉える」ことさえできていない。そのため、多民族による異なる文化に対する尊重が必要とされる。

生業の特徴からみても、人類は自然を支配するのではなく、自然の一部であるという観点によると、遊牧生活における合理性は環境にとっても合理的であり、自然破壊と回復を繰り返す農業に適さない地域で、持続的な発展を維持する生業様態であり、「科学的発展」の政策によって、産業社会へと転換させることは合理的ではない。

21世紀初期のモンゴル族牧畜社会は、生態保護政策の実施により、多くの地域で自然放牧さえ出来なくなり、限られた場所での遊牧の維持も、新農村・新牧区の建設、都市化を促進するという名目で、新たな地域社会に再編され、伝統的村社会の崩壊を迎える時期であった。